



# LA NOUVELLE

## N°21 AUTOMNE

東京外語仏友会

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10

本郷サテライト 東京外語会気付

発行責任者 藤倉洋一 (昭45)

2018.10.1 発行

### 第23回仏友会総会

4月21日(土)恒例の仏友会総会が東京・大手町サンケイプラザで開催され、総勢58名の出席者で賑わった。

藤倉会長の挨拶、金澤副会長の会務報告の後、会計・監査報告が承認された。今年は2年に一度の幹事改選の年で、藤倉会長以下、現在のメンバーが再任されたほか、新たに村上直久氏(昭49)が加わるようになった。(その後5月に、大谷恵子さん(昭53)も幹事に就任いただいた。)

続く講演会では、幹事で弁護士の谷川徹三氏(平12)に1時間半ほどお話しいただいた。氏は、5年前に新橋IT法律事務所を設立され、企業法務を中心に、民事・家事事件を幅広く扱っておられる。出席者の身近に起こる事件だけに注意を喚起されたご講演であった。(氏によるご講演内容まとめ下記)

恒例の記念撮影には昨年秋の外語祭のフランス語劇『ノートルダム・ド・パリ』出演者代表の3年生らも加わった。懇親会では、和賀副会長が司会を務め、南仏産の赤白ワインのグラスを手に、和気藹々の雰囲気と会話を楽しんだ。

(幹事 中村日出男 昭49)



昭和44年卒までの出席者と現役学生

を見つけておくのが一番ですが、完全に防ぐことは難しいとお考えいただいた方が現実的です。つまり、被害に遭ったご家族やお知り合いの方を責めたり、ご自身が被害に遭われた際に恥ずかしく思ったりするべきではありません。交通事故と同じく誰が被害者になってもおかしくないと考えべきです。

死後離婚・死後認知については、聞いたことがない方もいらっしゃるかと思います。まず「死後離婚」は俗語です。正しくは「姻族関係終了届出」です。夫婦の一方(多くは夫)が亡くなった後に、残された配偶者が配偶者の家族と親族の関係を断ちたい場合に「死後離婚」を行います。親族関係があると扶養義務が発生することがありますし、何かと煩わしいことを求められることもありますので、これらを防止するための手段です。次に、死後認知は、我がフランス語科の大先輩である梅謙次郎氏(1880明治13卒)によりますと、「生前は婚外子の存在を恥じて隠したが死に臨み自己の過失の結果を永遠に子に負担させることが良心に耐えかねて」なされるものと言われています。深い話です。

ストーカーについては、「若い人」にしか関係がないと誤解している方もいらっしゃいますが、警察庁が発表した平成29年の統計では、60歳以上の被害者が804人、加害者が2,287人となっており、60歳以上でもかなりの人数がストーカーに遭ったり、なったりしています。なお、ここでいうストーカーは、単なるつきまといではなく、「恋愛感情その他の好意の感情又はそれが満たされなかったことに対する怨恨の感情を充足する目的」がある人です。

成年後見制度については、ご存知の方も多くいらっしゃると思いますが、判断能力の不十分な方を保護する制度です。典型的には加齢に伴う判断能力の低下に際して利用されます。判断



昭和45年以降の出席者と現役学生

能力が大きく低下したり、失われたりした方の利益を保護するとともにそのような方との取引の安全を守るために、代理人や本人を助ける人を選任する仕組みです。例えば、1万円札と5千円札の区別がなくなってきた男性の子どもが保佐人になった事例があります。十分な判断能力があるうちに、信頼できる実子などに代理人を任せる任意後見制度というものもあります。加齢や病気に伴って判断能力が低下した場合には、成年後見制度の利用をご検討下さい。

相続については、なんのこともわからないという方は少ないと思いますが、相続を他人事だと思われている方は、大勢いらっしゃると思います。そのような方の多くは、自分や親には財産がないから相続は関係ないと仰います。果たしてそうでしょうか。「そんなこと言っても親もあなたもお金ため込んでいるでしょ。」ということではなく、法的には相続に無関係という方はほぼいないということです。相続人は、被相続人が死亡した時からその一切の権利義務を承継するのが原則です。天涯孤独の人でも親がいなかった人はいません。親(=被相続人)がいたということは法的には親が亡くなった時に親の権利義務を相続しています。「それは弁護士が言いそうな屁理屈で自分には財産が無いから相続なんて気にする必要がない。」とお考えの方は多いと思います。確かに、財産が無いために問題にならない相続は無数にあります。他方で、被相続人の方がきちんと身辺整理を考えていたら、相続人がいがみ合うことにはならなかったという相続も発生しています。

いずれにしても、何かあった時には気軽に相談できる人を見つける「さぎょう」をしておきましょう。

### 今知っておくべき「さしすせそ」

谷川徹三(平12)



多くの人にとって他人事ではない5つの話題である、(特殊)詐欺、死後離婚・死後認知、ストーカー、成年後見、相続について、順にお話しします。

「特殊詐欺」は、不特定の相手に対して対面することなく実行される点が通常の詐欺と異なるため、「特殊詐欺と呼ばれています。特殊詐欺については、「振り込め詐欺」が日常的に報道されていることから、被害の大きさや手口についてはご存知の方も多いと思います。自分は騙されないと考えている方も多いと思います。他人事として聞く分には、対岸の火事に過ぎない犯罪ですが、わが身に降りかかった際に平常心でいられる方は少ないと思います。平成29年の被害は1万8,201件、被害金額約390億円、被害者の7割が65歳以上という状況です。被害に遭わないためには、相談できる人(同窓の弁護士など)

### 人生を決める一言

佐藤 研(昭48)



70歳を越えた現在、ふり返ってみると、或る時の出会い、その時の或る一言がいかにか自分を決定づけたかをまざまざと思い知り、その摩訶不思議さに圧倒されそうになることがある。おそらく読者の誰もが、そうした体験を少なくとも二、三は持っているはずだと思う。

私は1968年4月に東京外国語大学フランス語科に入学したが、この選択は今思っても奇妙な偶然であった。私は高校の最終学年になったとき、生意気にももう英語には飽きた、ヨーロッパの他の言語と文化を学んでみたいと考えた。そこで、クラス担任で英語主任のK先生のもとに進路相談に行かなければならなかったとき、自分のその辺の思いを述べ、「フランスとドイツとの間で迷っている」というようなことを言った。自分としては、イメージ的にドイツに合うものをより感じていたと思う。ただ、私はこのK先生が漂わず一種の権威主義が大きらいで、あまり正直に自分のことを相談したいとは思わなかった。全員が行かなければならぬ進路相談だったので、赴いたまでの話だった。するとK先生は、いつもの断定的な調子で、「君は全然フランス的ではないから、ドイツを選び給え」と命じた。私は途端に(自分の田舎出身をからかわれたように思ったのだろう。)どこかカチンと来るものを感じた。そして、その場では反論しなかったものの、「それならフランスを選んでやる」と心で決し、外語大のフランス語科を志望したのだった。K先生に一泡吹かせたかったのである。

この時の小生意気な反抗性がなければ、私は自然の成り行きでおそらく外語大のドイツ語科を選んでいたのであろう。そうなれば(たとえドイツ語科に入学できたとして)その後どうなったかは、まったくわからない。ただ明確なのは、フランス語科の同じクラスの或る友人に会って決定的な影響を受けることはなかっただろうし、また、その友人を通して一人の圧倒的な感化力を持った教師(大学の外)に出会うこともなかっただろう。そして、その帰結として、大学院レベルの自分の専門を「フラ

ンス学」から「新約聖書学」に変えることもなかっただろう。したがって、「新約聖書学」の1970年代のメッカであったドイツおよびスイスの神学部(ドイツ語と悪戦苦闘しながら)留学することも考えられず、また、こともあろうにスイスの大学の神学部時代に、日本にいた頃は軽蔑し切っていた「坐禅」に偶然に出会うこともなく、結局は今現在、ドイツで多くの時間を坐禅の指導に費やしているということもありえなかったと思われる。おかげで、外語大入学後にやってみたら結構好きになったフランス語とフランス事情にはすっかりご無沙汰し、爾後「フランスへの片思い」と自嘲し続ける羽目になってしまった。この奇遇の長い連鎖の開始が、あの、「君は全然フランス的ではないから、ドイツを選び給え」という言葉へのムツとした青年的反抗であり、それ以外ではなかったことを思うと、この人生のブラックユーモア的な展開にどこか異様なショックに似た思いを覚えてしまうのである。

人生はどこまで生まれ落とされた運命の因果関係の自然な織物なのか、またどの時点でそうした因果関連をもちからかって無視するような突然変異的な動機が入ってくるのか、適切に語ることは容易ではなからう。ただ、そうした漠とした二つの決定要素群が混じり合い、せめぎ合い、場合によっては格闘し合っているような印象を自分の人生に対して持つ人は、決して少なくないのではなからうか。哲学的に言えば、「必然」と「自由」の兼ね合いの問題とも言える。しかし、人生70年も経つと、自由な反抗や全く予想外の事態の展開も、どこか避けがたい大河的必然であったようにも思えてくる。そしてその必然感自体が、何となく奇妙に自由と親しさの息吹を感じさせるものとなって来るような気がする。「君は全然フランス的ではないから、ドイツを選び給え」という宣告とそれへの反抗も、もしかしたら私にはどこか起こるべくして起こった事態なのではないだろうか――。

このように感じることは総じて、生命感の衰退、つまり老年の証しなのだろうか。それともこれまで埋もれていた或る隠れた感覚の発現なのだろうか。よくはわからないが、ただ、70歳を越えて、これまでとは異なった人生感覚の時期が始まったことだけは確からしいと感じている。

(立教大学文学部名誉教授)

### 第24回サロン仏友会のお知らせ 《講演とボジョレ・ヌヴォオを楽しむ会》

日時: 2018年11月18日(日) 午後2時~5時

会場: 本郷サテライト 3F・7F

会費: 3,000円 同時に2018年分通信費(1,000円)も申し受けます。

《講演》 午後2時~3時20分

講師: 袖川裕美氏(昭和55年卒)

愛知県立大英米学科准教授、通訳

演題: 「ある同時通訳者の悲喜こもごも  
—日本語と英語の狭間で—」



(撮影/合田昌史)

袖川氏は東京都出身。大学卒業後、ブリティッシュ・コロンビア大学(カナダ)で修士を取り、その後BBCワールド(ロンドン)で放送通訳に従事。以後、NHK・BS、BBCワールド(東京)、CNNを中心に放送通訳や会議通訳を務めてこられた。『同時通訳はやめられない』(平凡社新書)などの著書もあり、現在では、大学や企業で教えるとともに、現役の通訳として活躍中である。

そんな氏の実体験を踏まえ、幅広いご活躍から得た人生の妙味を、ご自身のキャリアと重ねてご披露いただく。お誘いあわせのうえお出かけください。

《ワイン・パーティ》 午後3時半~5時

個別通知: 10月半ばまでに、メルアド登録の会員にはE-mailで、その他の登録会員には往復はがきでご案内します。申し込み〆切は11月10日。

連絡先: 勝亦杏子(昭46)

anzuko@k08.itscom.net



## 《パリ便り》 変身するキオスク

外語大を卒業後、放送局の記者となり、退社してパリでメディアの研究を始めたのが17年前。現在は、プロフェッション・リベラルのビザを取得し、主にテレビ番組の撮影を補助するメディア・コーディネーターとして活動しています。日本にニュースを伝える特派員とは異なる立場で、テロ、人質事件、大統領選挙などの現場取材を経験しました。取材の一方で仏メディアの伝え方、メディアを取り巻く事情などを観察し、「仏メディア事情」として日本のメディアに寄稿しています。

今回は「パリ便り」ということなので、パリのメディア事情をお伝えします。パリの駅や路上で新聞・雑誌を販売するキオスクが登場したのは1857年。紙媒体には黄金の時代でした。しかし、ソーシャルメディアで情報収集が可能になった今、街中のキオスクを利用する人は少なくなりました。私がパリに住み始めた2001年、テレビやラジオでは聞きとれないニュースを理解したくて、キオスクで新聞を買ってきては熟読したのを懐かしく思い出します。当時は、通勤途中の人々が足早に新聞を買っていました。今やキオスクに行かなくてもデジタル版で新聞が購読できる時代。次第に、扉が閉じたままのキオスクが増え、新聞雑誌の小売店は次々と閉店に追い込まれていきました。私が住む17区の新聞雑誌小売店が、ある日、コンビニ風のスーパーに様変わりしたのには驚きました。

そんな時代の流れに反して、パリ市はキオスクの支援に乗り出しました。4月にイダルゴ市長出席のもとで新しいキオスクの落成式が行われ、メディア各社が大きく取り上げました。現代版キオスクは、かつてより広く、明るく、50%の電力を節約

高橋真美（平3）



できます。また、販売員の労働環境も改善されます。以前、公共放送フランス5で放映されたドキュメンタリーで、キオスク販売員は気軽にトイレにも行けず、冬の寒さに震え、時給1〜3ユーロしか稼げない厳しい生活が伝えられていました。新キオスクは暖房も整備され、新聞・雑誌の他にも飲み物や土産品などを売ることができるようになりました。これまで、駅のキオスクでは認められていましたが、街中のキオスクは原則的には新聞・雑誌販売に限定されていたのです。パリ市は、販売物の3分の2はプレス、残りはキオスク店主が販売物を選択できるように規制を緩和しました。

キオスクの規制は他にもあります。戦後、紙媒体の多様性を守るために制定された「ビシェ法」により、キオスクは全銘柄の新聞・雑誌を陳列しなければなりません。3月5日付日曜新聞JDDの記事の中で、パリ5区のキオスク店主が「900もの銘柄を陳列しなければならないが、250銘柄は一度も売れたことがない」と嘆いていました。同記事によりますと、紙媒体の販売部数は10年間で50%減り、未販売率は50%に上るそうです。「ビシェ法」は、本来、販売の自由や市民の情報へのアクセス、発行人の公平な扱い、などを保証するものでしたが、ネット時代が到来し、キオスク販売店にとっては厳しい規制となりました。政府は現在、更なる規制緩和に向けて公聴会を開いています。

パリ市が、公共の場で新聞・雑誌を販売するキオスクを維持しようとする試みですが、現代版キオスクは、来年6月までに市内360か所に増えていく予定です。扉が閉まったままのキオスクに対し、パリ市は2000ユーロの助成をすることを決めています。また、パリ市が市内の広告を削減する方針であることから、キオスクの表面に掲載される広告も20%減らすそうです。パリの街並みに似合う新キオスクとうたわれますが、デザインについては一悶着ありました。提案された新キオスクの色はグレーでした。私がパリに住み始めて、ゴミ箱の色が緑からグレーに変わり、レンタル自転車ヴェリブもグレー、広告塔もバス停

もグレー、公衆トイレもグレーです。そのため、一部のパリジャンが「大きなゴミ箱」「公衆トイレのようなルックス」などと批判し、60%の現代版キオスクは以前のようなグリーンを維持することになりました。40%だけがグレーに変わるそうです。また、1857年当時のデザインを惜しむ5万8000人が陳情し、オスマン式と言われるドーム状の屋根とフェストン（花綱装飾）を求めました。陳情を受けてパリ市は、現代版キオスクのファサード上部にフェストンを追加することにしたそうです。

パリにお越しの際は、新しく生まれ変わったキオスクのデザイン、販売物、そして販売員の笑顔、などにも注目してはいかがでしょうか。パリ市は販売員向けの研修も開催するそうです。デジタル化の流れに飲み込まれず、印刷物の販売拠点を守ろうとするパリ。歴史が築いた遺産をパリは現代風に維持しているとしています。

### =あなたも幹事に!! =

●いつもご理解とご協力を頂き有難うございます。改めてご挨拶とお誘いをさせていただきます。●当会報誌の連載コラム「80年のタイムカプセルを開ける」でお馴染みかと思いますが、嘗て、大先輩達が築き我々に貴重な「時代の声」を残してくれた「佛友會」に倣って、1996年に現在の「東京外語仏友會」が新たに発足しました。以来20余年間、春の「總會」と秋の「サロン仏友會」、そして10年前から会報誌「LA NOUVELLE」の発行を加え、これを活動の3本柱として邁進してきました。回数を重ねたことで、収穫も多かったと自負しております。●今後も「同窓ならではの和やかな交流の場づくり」を目指して、仲間の輪を広げ深めたいと幹事一同思いを一つにしております。●そこで、皆さまに、仏友會のさらなる充実を目指して、ご支援を仰ぎたいのです。幹事会に新しい風を吹き込んでいただくために、新しい方々のご登場を願っています。縛りは一切ありません。自由闊達な意見で幹事会を活性化してください。●同時に、アイデアの提供、知人紹介、またイベント当日の作業へのご協力も心強いサポートです。皆さまからの嬉しいご連絡を一同心からお待ちしております。  
(副会長 和賀千恵子 昭45)

## 《新幹事自己紹介》

### 幹事会で刺激を楽しむ！？

フランス語科卒業以来、ずっと建設・設備関係の会社で海外プロジェクトや海外子会社の設立・管理に関する業務をしておりますが、3月末で退職し、新たな一步を踏み出しました。今後の生活をどのように豊かにしていくか、諸先輩方にも体験をお聞きしながら考えていきたいと思っております。仕事では、フランス語を活用する機会は多くなかったのですが、すっかり忘れてしまいましたが、体育の授業で経験した社交ダンスは、一生の趣味となりました。実家及び夫の母のお手伝いのため、時々田舎に帰る必要もあり、しばらくばたばたしそうですが、少しでも仏友會のお手伝いができれば…と思っております。どうぞよろしく願い致します。

幹事会に出席して、幹事の皆様よりいろいろな刺激をいただき、楽しいひとときを過ごしております。お手伝いできる方がいらっしやいましたら、ぜひ一緒にやってみませんか？

大谷恵子（昭53）



### 母校との絆

東外大との関わりは約50年前に始まった。高田馬場の予備校で行われたわずか数時間の入試。全国的な学生運動で入試も混乱した1969年のことだ。英数国は易しく、世界史の文章題はヤマが当たり、合格してしまった。ただ、その年はストで暮れまで授業はなかった。

卒論は岩崎力先生の指導でフィリップ・ソレルスの文学論集を取り上げた。4年目と5年目（自発留年）は海外旅行の添乗員として見聞を広めた。その後、東京教育大学大学院を経て、時事通信に入社。海外畑を歩き、ニューヨーク（UPI通信出向）とブリュッセル（特派員）での駐在を含めて、合計26年間在籍した。退職後、新潟県の長岡技術科学大学で教鞭を取り、国際関係学と英語を教えた。卒論と修論の指導もした。2015年3月末に定年退職。昨年、7年間の悪戦苦闘を経て、東外大から博士号（論文博士）を授与された。外語と再びつながった瞬間だった。

村上直久（昭49）



## 昔日の青春 佛友會々報 80年のタイムカプセルを開ける 16

坂井英俊（昭40）

ここに「目黒の秋刀魚」ならぬ「目黒のかます」と題された一文の寄稿がある。（当時外語第二回生）巖谷春生氏のもの。〈それはある年秋の半ば、馬鹿に天気の良い土曜日だった。〉と、彼はのどかに語り始める。〈われわれは例の通り先生に引率されて校門を出た。その頃は無論今のように交通機関が発達していない、どういう道順を取ったものか確かには憶えては居ないが、兎も角一ツ橋から目黒不動の付近までのぼしたのだ。電車あり「バス」あり、乃至円タクのある今日の学生諸君には到底こう云うべら棒なまねはできまいがその頃の我々は親譲りの二本足を可也酷使したものだ。途中横道へ這入り丘を登り崖を下りやと行人坂近辺まで出るともう二時間過ぎ、とても腹が減って咽喉が乾く、全くやりきれないとこんな時うっかり煙草でも吸はうものなら、ソレコソ目が眩む。早く何處かで一休みして咽喉に温まりを呉れ胃袋に何なりと詰め込みたいのは、敢えて僕一人ではなかったのだ。處があいにくと又この道には掛茶屋一軒さへもない。一同はただもう無言の行といった恰好で、とも角歩いておると云ふにすぎない…全体だれが目黒などを選定したのだい？と今さら論議した處ではじまらない。が、こうなると寧ろ教室の方が恋しひなアと思う瞬間、

“Y a la goutte à boire haut!”.....“T ra la la la”..... と、突然後ろのほうで唄ひだした、而も大きな聲で！振り向くと誰ある

う、声の主はまさにジャクレー先生！帽子を阿弥陀に角刈りの美しい額から、タラタラ流れる汗を拭きふき一行を励ますべく一生一代にとって置きの大声をはり上げたものとわかった。是を見た一同感極まって泣き？…勇気俄かに百倍、各々合唱して進む！と、形容する様な其の実、胃袋の方は尚盛んに空虚を訴へて居る。やとこさのことであるささやかな駄菓子屋を見つけた。一議に及ばず一同店先へとびこんだが、さればチト変則などと考へる余裕のない一行は、駄菓子屋のお爺に向かつてまず炭茶でも水でもかまはぬからと強制的に要求し、一同店ざらしの薄荷糖と鉄砲玉とを直接行動でほおぼるのであった。面食らったのは店のお爺に相違ない。馬賊の襲撃を受けたときはコンナでもあらうかと思はれるような顔つきをして吾人の威力？に全く沈黙を守った…。自分たちの空腹も勿論だがわれわれはまず先生に同情を寄せ、老爺に頼んで先生のためまず食パンの調達に及んだ。するとジャクレー先生急に「この辺に干物はないかね」と意外なお尋ね…エッ干物？先生それは食べるのですか？「無論食べるのサ！」実の處我々は先生が干物を所望されるなどとは今日までテンデ想像もつかなかったのだ。しばらくすると親切なお爺は何處からさがして来たか食パンとカマスの干物を四、五枚ぶらさげて帰って来た。其れを見た先生は頗るご満悦の面持ち、やがてうまさうに焙られた干物が皿に盛られて先生の前へ出る。我々は空腹を忘れて驚異の目を見開いて先生を見る、勿論「ナイフ」もなければ「フォーク」もない。すると先生指先でカマスをむしり「パン」へあしらって、如何にもうまさうに口へ入れたその様子が、今でも目に残って居る。

このカマスは先生ことのほかお気に召したと見えその後も幾度か当時の美味を繰り返して賛美されたことだが、所詮ひもじい時の不味いものなして、先生も当時極度の空腹を訴へて居られたものに違いない。「目黒の秋刀魚」という話は寄席でしばしば聴く有名な落語だが、これは又、カマスの干物がジャクレー先生を通じてさらに目黒の一名物となったわけである。>

在りし日の東京外語、その授業風景はのどかなものであったが、これは指導者がとかく個人の自由や、痛快なファンタジーを喜ぶ人だったからでもあろう。窮屈な日本人教師ならこんな奔放はできなかったであろう。小学生以来の筆者の恩師・野尻抱影先生は「先生と呼ぶるほどの者は師弟に知識以外の人格的影響を与えるようではなくてはならない」と。それは日々生きてゆくなかで、事態に応じて伝わる先生の気品のようなものであるのかもしれないし、「これが真の気品だ、あれこそが学ぶべき人格だ」と、画の様に指し示せるものではないのかもしれない。

千年以上の昔から日本人にとって「学ぶ」とは、まずは儒教を学ぶことであった。それは仁・義・礼の生活哲学からなり、世俗的成功を目指すストイックな修行の道であった。修身教科書では、雪山を越え病床の母へ薬を届けに来た幼い息子（後の渡辺崋山）を、母は「学問の途中に要らぬことを」と暗い山中へ追い返したという。「教育はかくあるべし」と戦前の国家はこれを是とした。だからジャクレー先生の指導が青春真ただ中の外語生徒をどんなに弾けさせ感動させたかは、想像するに余りあるものがあつた。  
<次回へつづく>